

# 北野遺跡

－北野東紅梅町の調査－

2016年

古代文化調査会







# 北野遺跡

－北野東紅梅町の調査－

2016年

古代文化調査会



## 例 言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市北区北野東紅梅町4番において、マンション建設に伴い実施した北野遺跡（(14S619) 15S183）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社アクセス都市設計より委託を受けた古代文化調査会の上村憲章が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は上村がおこなった。
5. 図面及び遺構・遺物の整理、遺構の製図は上村がおこない、遺物の実測は板谷桃代がおこなった。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。記載した数値はm単位で、水準はT.P.（東京湾平均海面高度）である。
7. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の25,000分の1（京都西北部）、京都市都市計画局発行の2,500分の1の地図（大覚寺）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準じた。
9. 遺物番号は実測図・写真ともに共通している。調査略号は「15KTNO」とした。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

馬瀬智光 鈴木久史 西森正晃 挟間 崇 堀 大輔 宮原健吾  
（株）アクセス都市設計 （株）明輝建設 （株）大高建設  
（公財）京都市埋蔵文化財研究所 （有）京都編集工房

# 本文目次

## 北野遺跡 -北野東紅梅町の調査-

I 調査の経緯	1
II 調査の経過	1
III 遺構	4
IV 遺物	7
V まとめ	10

# 図版目次

図版1 遺跡	第1面平面実測図
図版2 遺跡	第2面平面実測図
図版3 遺跡	断面実測図1
図版4 遺跡	断面実測図2
図版5 遺跡	1 調査区近景 (東から) 2 第1面全景 (東から)
図版6 遺跡	1 第2面全景 (東から) 2 第2面西部 (東から)
図版7 遺跡	1 第2面北東部、溝76 (東から) 2 第2面石敷(路面)77部分 (南から)
図版8 遺跡	1 第3層上層掘下後全景 (東から) 2 第3層掘下状況 (南東から)
図版9 遺跡	1 第1面南部 (北東から) 2 第1面北部 (南東から) 3 土壌4 (東から) 4 土壌5 (南から) 5 第2面石敷(路面)77 (北から) 6 Y-24,408m セクション (南東から)



7 Y-24,412m セクション (南東から)

8 Y-24,416m セクション (南東から)

図版 10 遺物 精査中・第3層上層・土壙4・土壙5・溝76・土壙78・第1層出土遺物

図版 11 遺物 土壙3・土壙30・精査時出土遺物

## 挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図	1
図 2	北野廃寺、北野遺跡調査位置図	2
図 3	Y-24,408m セクション実測図	4
図 4	Y-24,412m セクション実測図	4
図 5	Y-24,416m セクション実測図	4
図 6	石敷(路面)77 実測図	5
図 7	溝 76 (Y-24,402m セクション) 断面図	5
図 8	土壙 4 実測図	6
図 9	土壙 5 実測図	6
図 10	弥生土器実測図	7
図 11	第 3 層上層出土土器実測図	7
図 12	土壙 4 出土土器実測図	8
図 13	土壙 5 出土土器実測図	8
図 14	溝 76 出土土器実測図	8
図 15	土壙 3 出土土器実測図	8
図 16	土壙 78 出土土器実測図	8
図 17	第 1 層出土土器実測図	8
図 18	土壙 30 出土土器実測図	8
図 19	精査時出土土器実測図	8
図 20	1995 年の調査区と今回の調査区	10

## 表 目 次

表 1	遺物概要表	11
表 2	掲載遺物一覧表	12



# 北野遺跡

－北野東紅梅町の調査－

## I 調査の経緯

調査地は、京都市北区北野東紅梅町4番で、北野遺跡に該当する。当遺跡は京都盆地の北西部に位置し、左大文字山・衣笠山の裾部と天神川（旧紙屋川）間に位置する。飛鳥時代に成立した北野廃寺とも重複しており、弥生時代から室町時代の複合遺跡とされ、これまでの調査では弥生時代から飛鳥時代の竪穴住居址、鎌倉から室町時代の建物、井戸等が見つかった。

当該地で、近鉄不動産株式会社によりマンション建設の計画がなされ、工事に先立ち京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した。株式会社アクセス都市設計との協議の結果、同文化財保護課の指導を受け当調査会が発掘調査をおこなうこととなり、2015年9月28日から同年11月30日までの間、調査を実施し、完了した。

## II 調査の経過

北野廃寺は発掘調査によって瓦積み基壇や、瓦窯の存在が確認されており、寺の存在がはっきりと認識される場所となった。蜂岡寺や広隆寺の前身とも考えられており、平安時代にはい

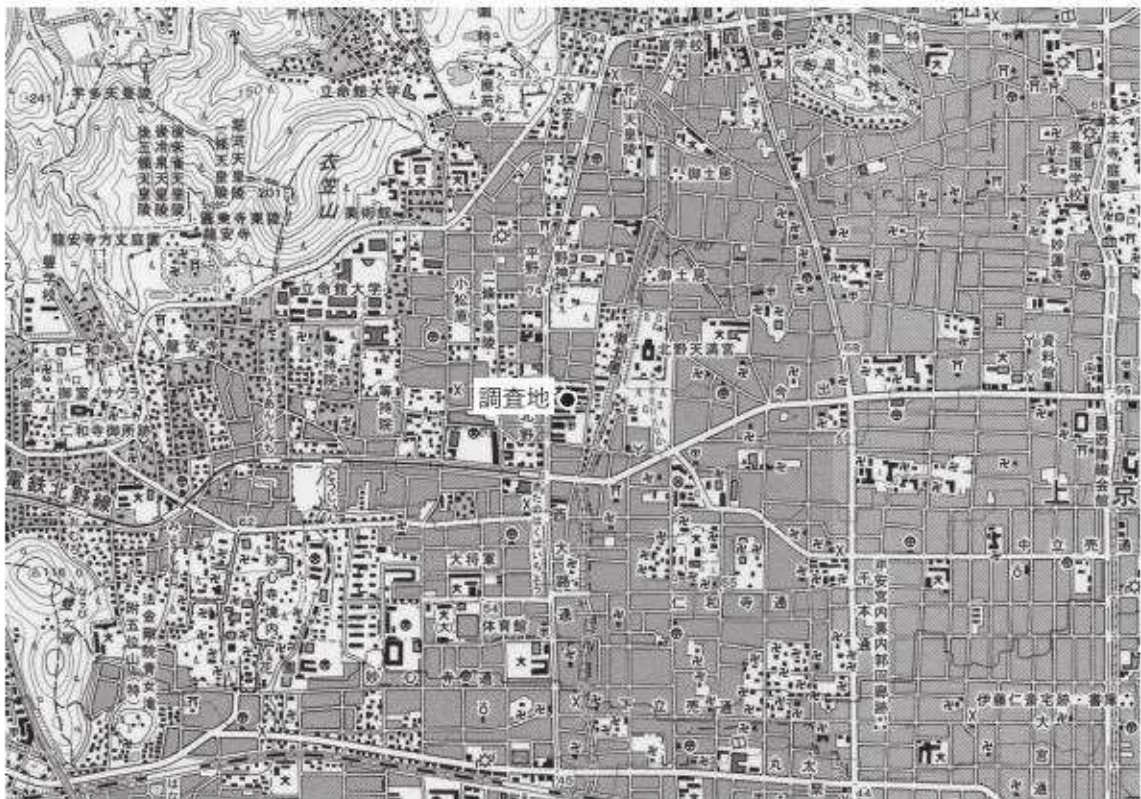


図1 調査地点位置図 (1/25,000)

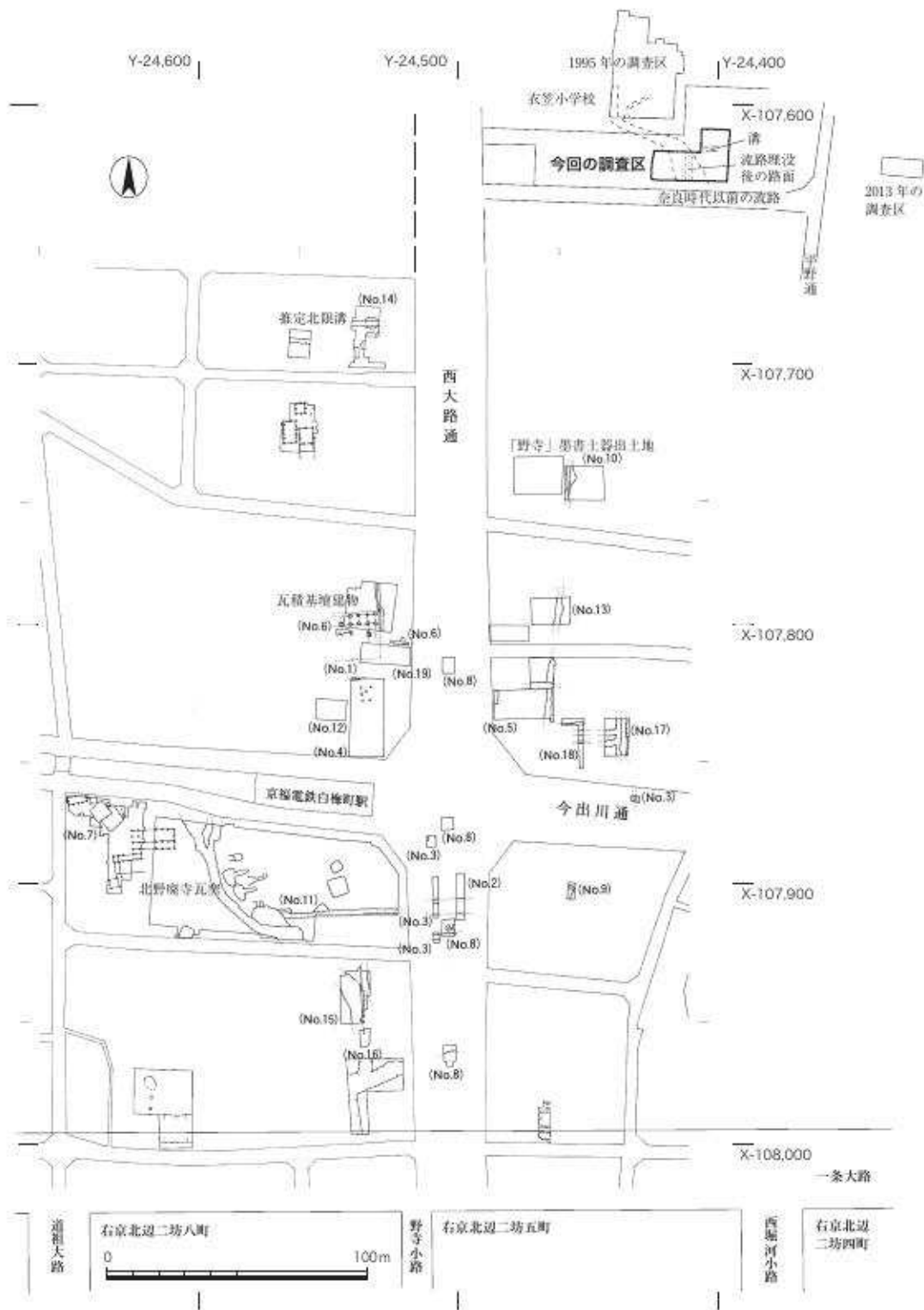


図2 北野廃寺、北野遺跡調査位置図 (1/2,500)

※図2は以下の文献と平安京条坊復元モデル60を参考に作成した。

『平安京提要』総監修角田文衛 角川書店1984年／リーフレット京都 No.291 仏教・寺院14 平安遷都をささえた官寺・常住寺 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2013年／京都市埋蔵文化財調査概要平成6年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年／北野遺跡 古代文化調査会 2013年

っての「常住寺」とも見られている。常住寺（野寺）は『日本後紀』延暦15年（796）11月の条によると、新鑄の隆平永宝を七大寺とともに施入されており、遷都後間もない段階で平安京の精神的支柱として機能した寺院であった。飛鳥寺院である北野麩寺の伽藍は官に接収され、右京北郊に接した新たな官寺である常住寺として再整備された。北野麩寺が常住寺であることは、「野寺」の墨書を施した平安時代初期の土師器が出土しており<sup>註1</sup> 確実である。常住寺の伽藍については、元慶8年（884）3月『日本三代実録』の火災記事より塔・金堂・講堂・鐘楼・経蔵・歩廊・中門があったことがわかる。

北野村について『日本歴史地名体系 27「京都市の地名」』（平凡社）では、「東は紙屋川（天神川）を挟んで洛中、西は松原・等持院門前の両村。北は平野村、南は大將軍村と接する。村域の東北部は古代中世を通じて北野天満宮の境内地に含まれていた」とされ、「『京都府地誌』は地勢を「一境平坦、東ニ紙屋川ヲ廻ラス、運輸便利、薪炭等西北数村ヲ仰グ」と述べ、紙屋川を利用しての薪炭などの運輸などが行われていたと記す。また地味は「田地漆黒ヲ帯ヒ、淺薄ニシテ水保チ難シ、畑地ハ概ネ砂礫多シ、穀菜ヲ植ウルニ宜シカラス、桑茶ハ適ス、水常ニ洽ネカラス、早損ノ患アリとあり、水田に不適とする。村では蔬菜・茶などを栽培し…」と述べている。

調査地の原現表土は概ね海拔 65.0m 前後を測る。地勢的に見ると北西方向から山根の緩やかな南下がりの斜面と、東側にある天神川（旧紙屋川）へ向かう東下がりの斜面成分が入り交じった地点である。東側の旧紙屋川は平安京の一部に取り込まれ一条大路以南では西堀川として利用されており、また桃山時代には秀吉によって御土居の一部として利用される。

近接部分としては北隣の衣笠小学校の校舎立て替え時に、事前に試掘調査が行われ、奈良時代の遺構が検出されたことから、1995年に（財）京都市埋蔵文化財研究所によって発掘調査が行われた。<sup>註2</sup> 2013年には東隣接地で古代文化調査会により発掘調査が行われている。<sup>註3</sup>

今回の調査では、調査面積 418 m<sup>2</sup>（敷地面積約 3277.45 m<sup>2</sup>）を設定し、奈良時代～平安時代前期の路面、溝、平安時代前の土壌、中世の柱穴、溝状遺構などを検出し調査した。平面直角座標系 VI による基準点測量データを使用し、4m メッシュのグリッドを設定し、遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。現場の基本図は 20 分の 1 で実測した。



### Ⅲ 遺 構

南壁際や調査区北東部では表土下、約 1.0 m 前後で第 1 面が現れる。標高は 65.0m 前後で南壁実測図で第 2 層 (図版 3)、Y-24,408m、Y-24,412m、Y-24,416m セクション (図 3～5) でそれぞれ第 1 層とした土層の上面であり、この面で土壌や柱穴、溝状の遺構等を検出した。南壁際や調査区北東部以外ではバックホーによるバケットの爪の痕跡が 63.5～64.0m までに及んでおり、以前の建物の基礎を撤去した時のものと思われ、第 2 面にもその影響が及んでいた。地山はいちばん高いところで 64.35m を測り、10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫でよく締っている。

奈良時代から平安時代前期の遺構

#### 石敷 (路面) 77 (図版 2・6 の 1・6 の 2・7 の 2・9 の 5、図 6)

第 1 面のベースとなっていた南壁の第 3 層と Y-24,412m セクションの 1～3 層の排土後に、幅 3.5m ほどで、 $\phi$  2～10cm 程の石を敷き固めた路面を検出した。調査区中央部付近は攪乱されていたが、調査区北壁付近では一部残存しており、南で約 5° 程度西に振れるようであるが、ほぼ南北に延びるものと思われる。標高は南部で 63.6～63.7m、北部で 63.5m ほどである。この石敷の中には須恵器甕の破片も含まれていた。溝 74 はこの路面方位に沿って、東端にあり、一部に限られていが排水などの機能を持たせた付帯施設である可能性も考えられる。

#### 溝 76 (図版 2・6 の 1・7 の 1、図 7)

調査区東側のほぼ中央部で検出した東西方向の溝で、約 7° ほど西側で南へ振れる。東端は攪乱されて削られている。幅は 1.3m 程で部分的には 1.5m 程はあり、深さは 0.25m を測る。底

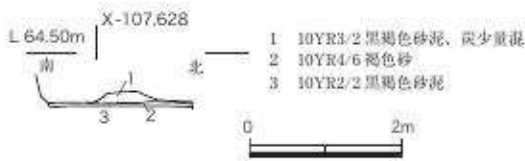


図3 Y-24,408m セクション実測図 (1/100)

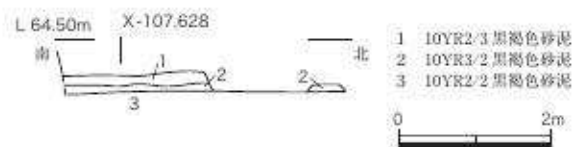


図5 Y-24,416m セクション (1/100)

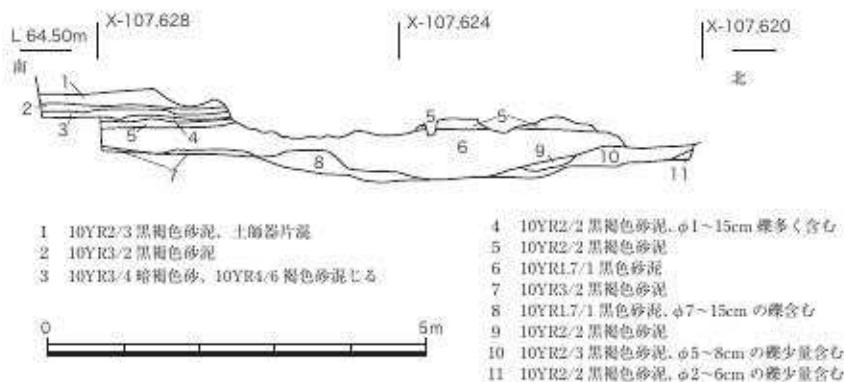


図4 Y-24,412m セクション実測図 (1/100)

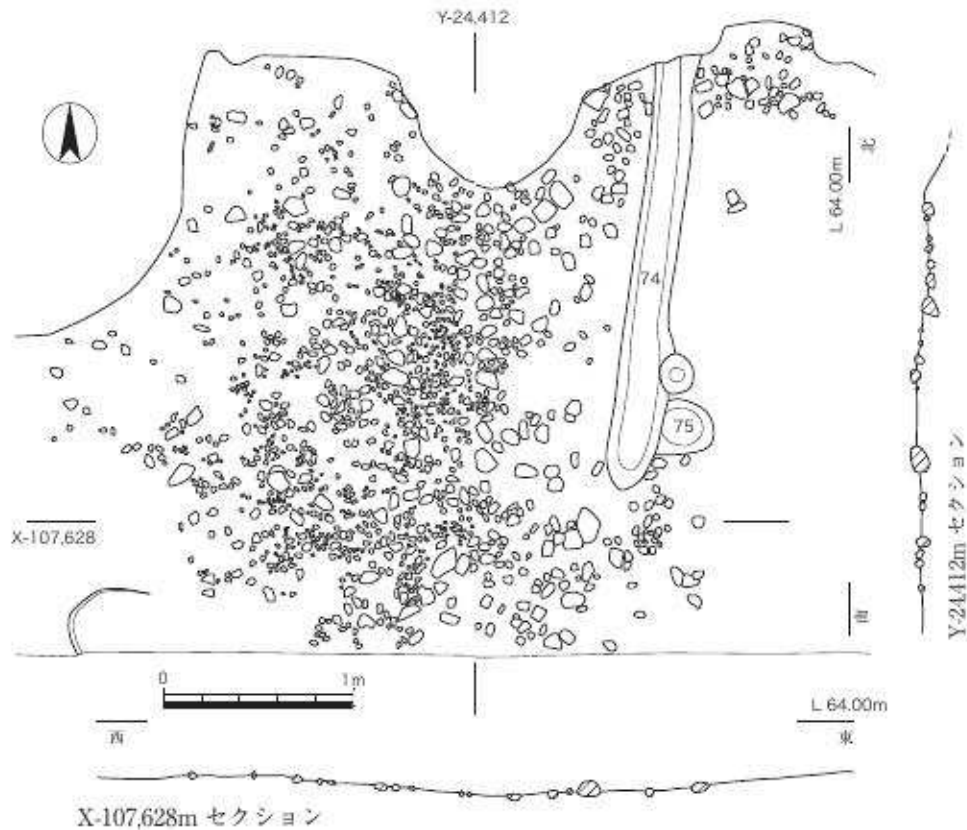
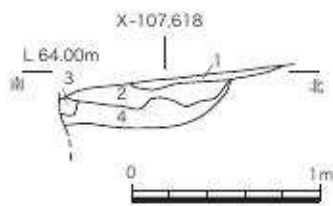


図6 石敷（路面）77実測図（1/40）



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 2 10YR3/1 黒褐色砂泥（粗砂泥）、10YR4/1 褐灰色砂泥・10YR5/8 黄褐色泥砂泥
- 3 10YR3/1 黒褐色砂泥
- 4 10YR2/1 黒色シルト

図7 溝76（Y-24.402mセクション）断面図（1/40）

部は西側に下がっており、東側から西側に向かって流れていたものと思われる。

平安時代前期の遺構

**土壌4**（図版1・5の1・5の2・9の3、図8）

調査区西部の北側で検出した土壌で、南北0.67m、東西0.73m、深さ0.10mを測る。10YR2/1 黒色砂泥が堆積する。

**土壌5**（図版1・5の1・5の2・9の4、図9）

調査区西部の南側で検出した土壌で、南北0.60m、東西0.95m、深さ0.10mを測る。10YR2/1 黒色砂泥が堆積する。

**土壌30**（図版1・5の1・5の2・9の1）

南北1.25m、東西1.72m、深さ約0.2mを測る。東西に長い平面形状で、堆積土は10YR3/1 黒褐色砂泥に、10YR5/4 にぶい黄褐色シルトがブロックで混じり、炭も少量混じったものであり、9世紀代の遺物が出土している。

他に平安時代前期と推定できる遺構は、土壌16・42・44・72・78、Pit20・26、溝57があり、

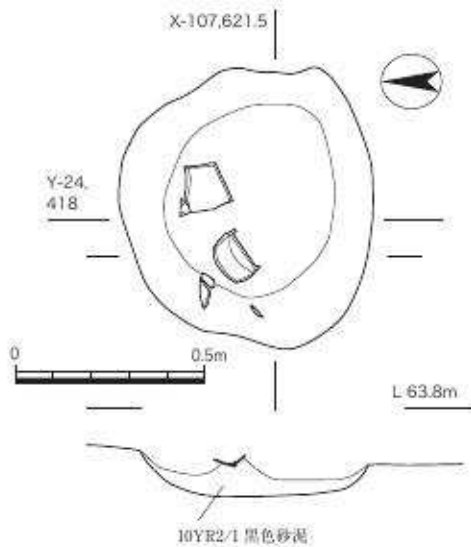


図8 土壌4実測図 (1/20)

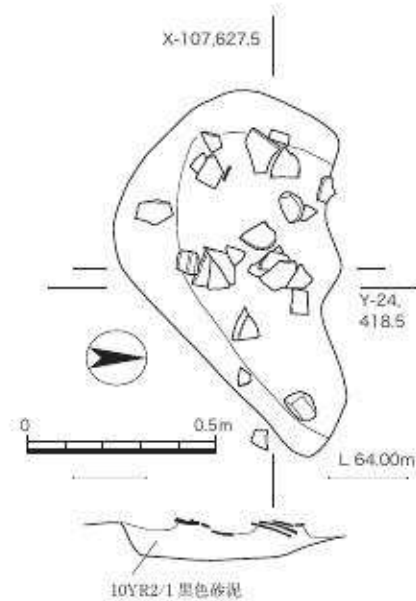


図9 土壌5実測図 (1/20)

平安時代の幅におさまると推定できる遺構は土壌 15・23・29、Pit32 がある。

#### 中世の遺構

##### 溝 53 (図版1、5の2、9の1)

調査区北部の西壁沿いで検出。幅0.26mあり、長さ0.55mを検出。深さは西壁際で0.10mを測る。耕作にともなう東西方向の溝と思われ、10YR3/1 黒褐色砂泥が堆積、室町時代前期(京都Ⅷ期)と思われる土師器皿 Sh の破片が出土している

##### 土壌 35 (図版1、5の2、9の2)

調査区中央部の南壁沿いに検出。東西1.12m、南北は0.26m以上では大半は南壁の外にある。深さは0.11mで10YR3/1 黒褐色砂泥が堆積する。室町時代と推定される土師器皿が少数出土した。

これらの他、中世と判断できる遺構には、Pit10・13・18・27、溝31・43がある。このうち室町時代におさまるものは溝43があるが、他は細く時期を推定するには至らなかった。

#### 近世以降の遺構

桃山、江戸時代の遺構は検出していない。土壌1・2は近代の遺物が出土している。



## IV 遺物

出土遺物は整理箱にして4箱ある。なお、時代区分は平安京の土器編年<sup>第4</sup>をもとにおこなう。奈良時代後期から平安時代の前期に比定できる土師器や須恵器類を主に検出している。

### 土器・陶磁器類

#### 弥生土器（図版10、図10）

調査区の精査中に弥生土器の破片が出土した。弥生時代後期の壺（1）の頸部と思われる。

#### 第3層上層出土土器（図版10、図11）

土師器皿A（8）、同鍋（9）、須恵器杯B蓋（2・3）、同杯B身（4・5）、同台付き皿（6）、同甕（7）が出土。奈良時代後半くらいから9世紀代に比定できる一群と見ている。土師器皿A（8）は内面に暗文がかるうじて認められ、口縁外面はナデのまま、外面下半から底部は削りを施す。

#### 土壌4出土土器（図版10、図12）

須恵器杯B身（10）が出土。

#### 土壌5出土土器（図版10、図13）

須恵器甕（11）が出土。

#### 溝76出土土器（図版10、図14）

須恵器杯B身（12）が出土。

#### 土壌3出土土器（図版11、図15）

灰釉壺（13）が出土。東海地方の製品と見られる。

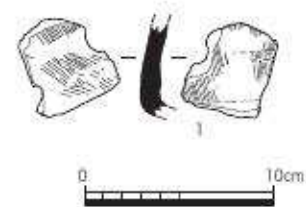


図10 弥生土器実測図（1/4）

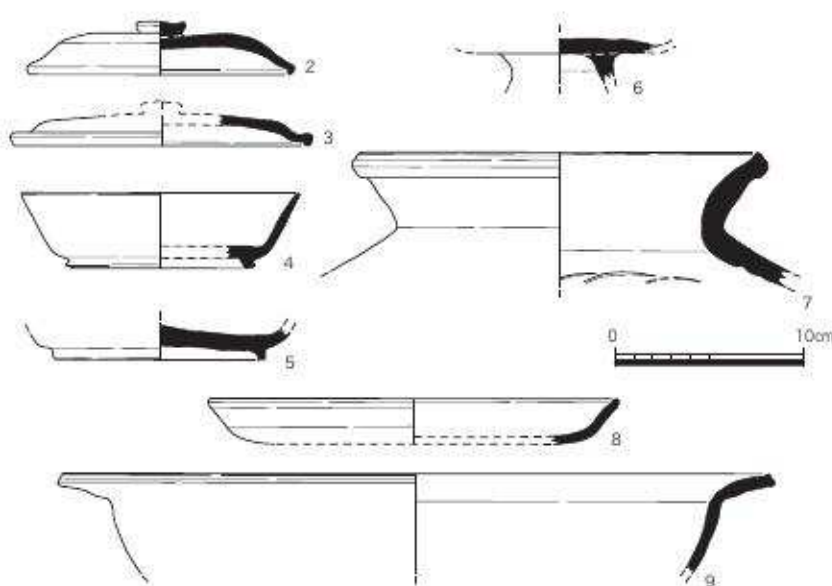


図11 第3層上層出土土器実測図（1/4）

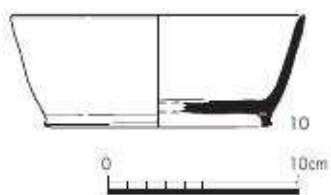


图12 土城4出土土器实测图(1/4)



图13 土城5出土土器实测图(1/4)



图14 沟76出土土器实测图(1/4)

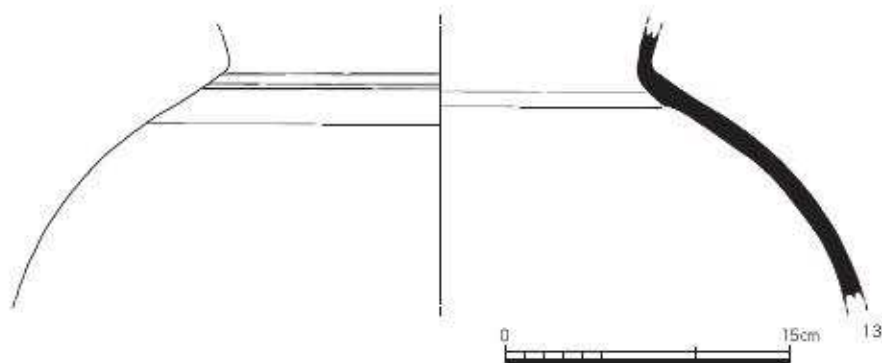


图15 土城3出土土器实测图(1/4)

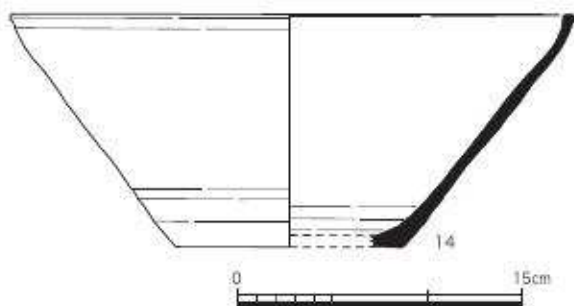


图16 土城78出土土器实测图(1/4)

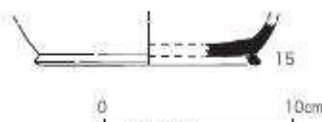


图17 第1层出土土器实测图(1/4)

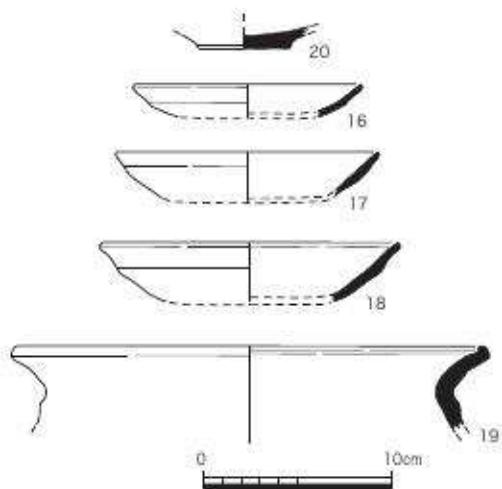


图18 土城30出土土器实测图(1/4)

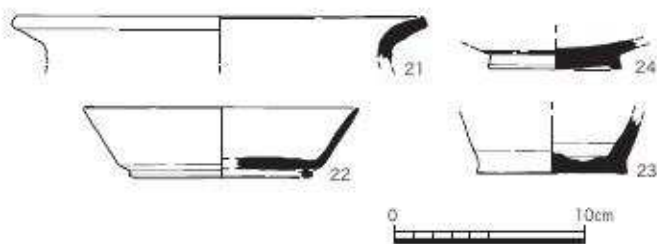


图19 精查时出土土器实测图(1/4)

**土壌 78 出土土器** (図版 10、図 16)

須恵器鉢 (14) が出土。平安京近郊篠窯跡群の製品と思われる。平安京Ⅱ期古～中くらいの個体と考えている。

**第 1 層出土土器** (図版 10、図 17)

須恵器杯 B 身 (15) が出土。

**土壌 30 出土土器** (図版 11、図 18)

土師器皿 A (16)、同杯 A (17・18)、同甕 (10)、緑釉陶器椀 (20) が出土。平安京Ⅱ期中くらいに比定でき、9 世紀後半くらいの一群と見ている。

**精査時出土土器** (図版 11、図 19)

土師器甕 (21)、須恵器杯 B 身 (22)、同壺 (23)、緑釉陶器椀 (24) が出土。緑釉陶器椀 (24) は浅い削りだし高台で、平安京近郊産の製品と考えられる。平安京Ⅱ期中に比定できる個体である。

## V まとめ

調査区の北側には衣笠小学校の鉄筋校舎があり、この校舎の建て替え時に（財）京都市埋蔵文化財研究所によって発掘調査が行われた（1995年1月～5月）。この調査では、飛鳥時代から奈良時代の溝・堰・柵・土塹、平安時代初期の回廊状建物・建物・溝・柱穴、平安時代中期の建物、室町時代の溝・柵・垣塹、江戸時代の溝・土塹等を検出している。

今回の調査では北西から南東に流れる流路、路面、溝、柱穴等を検出した。流路には黒色の砂泥からシルト質の粒子の小さい堆積土があり、最上層の0.2～0.3mくらいのところから奈良時代から平安時代初頭の遺物が出土している（第3層上層出土遺物としてあつかった）。それ以下の下層には遺物は含まれていない。この流路が埋まってから南北方向の路面が形成される。小石を敷き詰めた状態で中央部はやや凹んでいる。

調査で検出された路面は、常住寺東限の北側への延長線上に在り、平安京の北縁から、常住寺の主要伽藍の東側を通り、1995年の調査で検出された建物群へ通じ、さらには平野神社辺りへ通ずる通路であったと思われる。南でみられるわずかな西への振れは、調査地の東側を通る現在の平野通りの振れと共通するものである。

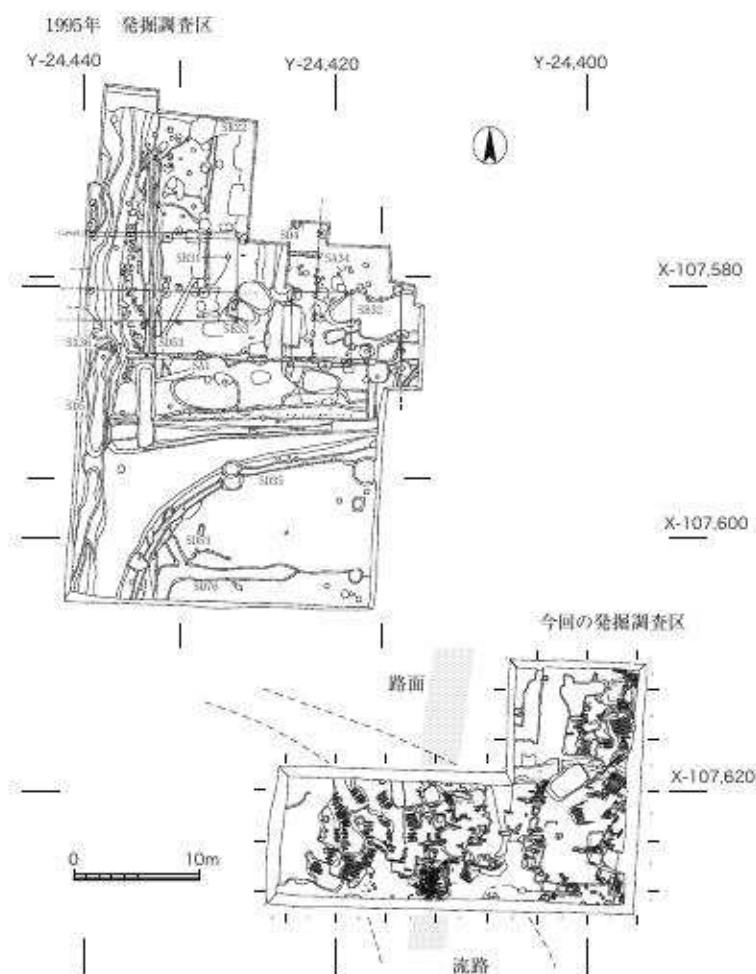


図20 1995年の調査区と今回の調査区(1/600)

平野神社は創建が平安遷都の頃（延暦年間）までさかのぼるようで、奈良時代、平城京に桓武天皇の母方の祖神を祀っていたものを平安京遷都を機に現在の地へ移されたものとされる。常住寺は9世紀後半まで伽藍が存在しており、京中より常住寺の脇を抜けて平野社へ向かう人々が往き来した様子を伺い知ることが出来る。

中世では土壙や柱穴、溝等の遺構も確認され、土地利用がつづいていたことも確認出来て、北野地域の一角での歴史的な変遷が明らかとなった。

〈註〉

- 註1 家崎孝治「右京北辺二・三・四坊、一条二・三・四坊と北野庵寺、北野遺跡」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 註2 平田 泰「北野遺跡」『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 註3 水谷明子「北野遺跡」古代文化調査会 2013年
- 註4 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年

〈参考文献〉

- 関口 力・高橋 潔「山背国時代の寺院」『平安京提要』総監修角田文衛 角川書店1984年
- 網伸 也「平安遷都をささえた官寺・常住寺」『リーフレット京都 No.291 仏教・寺院14』（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2013年
- 網伸 也「平安京と東西寺・常住寺」『都城制研究（8）古代都城と寺社』奈良女子大学古代学学術センター 2014年

表1 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	壺		壺1点		
奈良時代	土師器、須恵器		土師器2点、須恵器6点		
奈良～平安時代	土師器、須恵器		土師器1点、須恵器5点		
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器		土師器4点、須恵器2点、灰釉陶器1点、緑釉陶器2点		
合計		5箱	24点（1箱）	4箱	0箱

表2 掲載遺物一覧表

口径・器高の単位は cm

番号	種類	器形	口径	器高	色調、特徴	遺構・層	実測番号
1	弥生土器	壺	-	-	75YR8/4 浅黄橙から 75YR7/6 橙色。φ 1mm 以下の小石粒含む。	精査時	5
2	須恵器	杯 B 蓋	14.2	2.8	N4/ 灰色。φ 0.5mm 以下の小石粒含む。	第 3 層上層	18
3	須恵器	杯 B 蓋	16.0	-	5Y6/1 灰色。φ 1.5mm 以下の小石粒少量含む。	第 3 層上層	19
4	須恵器	杯 B	14.7	4.0	25Y6/1 黄灰色。φ 3mm、1mm 以下の小石粒含む。高台は貼り付け。	第 3 層上層	23
5	須恵器	杯 B	-	-	25Y7/1 灰灰色。φ 1mm 以下の小石粒含む。高台は貼り付け。	第 3 層上層	22
6	須恵器	台付皿	-	-	5Y7/1 灰白色。φ 1.5mm 以下の小石粒少量含む。	第 3 層上層	20
7	須恵器	甕	22.0	-	5Y7/1 灰白色。φ 1mm 程の小石粒含む。内面に青海波の叩き出し具、外面に叩き目が残る。	第 3 層上層	21
8	土師器	皿 A	21.8	-	5YR6/6 橙色。細砂粒含む。口縁端部は内側に肥厚する。	第 3 層上層	24
9	土師器	鍋	38.0	-	75YR7/6 橙色。φ 2.5mm 以下の小石粒含む。摩滅し整形・調整痕不明。	第 3 層上層	17
10	須恵器	杯 B	15.6	5.9	外側 75Y5/1 灰色。内側 5Y6/1 灰色。1.5mm 以下の小石粒含む。高台は貼り付け。	土層 4	13
11	須恵器	甕	-	-	内側 5Y6/1 灰色。外面 N6/ 灰色。口縁端部は外側へ折り曲げて処理する。	土層 5	14
12	須恵器	杯 B	12.0	4.2	5Y6/1 灰色。φ 2mm 以下の小石粒を含む。貼り付け高台。	溝 76	15
13	灰輪陶器	甕	-	-	輪は外面にかかり、5Y6/3 オリーブ黄色に発色。胎土は 75Y7/1 灰白色。外面肩部から肩部に格子目叩き痕あり。東海産。	土層 3	11
14	須恵器	鉢	30.0	12.4	75Y6/1 灰色。底部は糸切り。焼成は甘い。平安京近郊産。	土層 78	16
15	須恵器	杯 B	-	-	75Y5/1 灰色。細い砂粒含む。高台は貼り付け。	第 1 層	12
16	土師器	皿	12.2	-	75YR6/6 橙色。φ 0.5mm 以下の小石粒含む。	土層 30	9
17	土師器	杯	14.0	-	5YR7/8 橙色～10YR8/4 浅黄橙色。細い砂粒含む。	土層 30	8
18	土師器	杯	16.0	-	75YR7/6 橙色～10YR6/4 にぶい黄橙色。φ 1.5mm 以下の小石粒含む。	土層 30	7
19	土師器	甕	25.3	-	75YR5/2 灰褐色～10YR7/4 にぶい黄橙色。器表残存歪く整形・調整痕不明。	土層 30	10
20	灰輪陶器	椀	-	-	輪は高台端に一部残存するのみ。いわゆるベタ高台。25Y5/2 暗灰黄色～25Y7/2 灰黄色。平安京近郊産。	土層 30	6
21	土師器	甕	22.0	-	10YR7/4 にぶい橙色。φ 1mm 以下の小石粒含む。	精査時	4
22	須恵器	杯 B	14.6	3.8	75Y6/1 灰色。底部はへら切りで、貼り付け高台。	精査時	2
23	須恵器	壺	-	-	5Y7/2 灰白色。底部は糸切りのまま。焼成ややあまい。	精査時	3
24	灰輪陶器	椀	-	-	閉出しの輪高台。輪は 75Y6/3 オリーブ黄色に発色。全面に施輪。胎土は 5Y7/1 灰白色を呈す。平安京近郊産。	精査時	1

## 報告書抄録

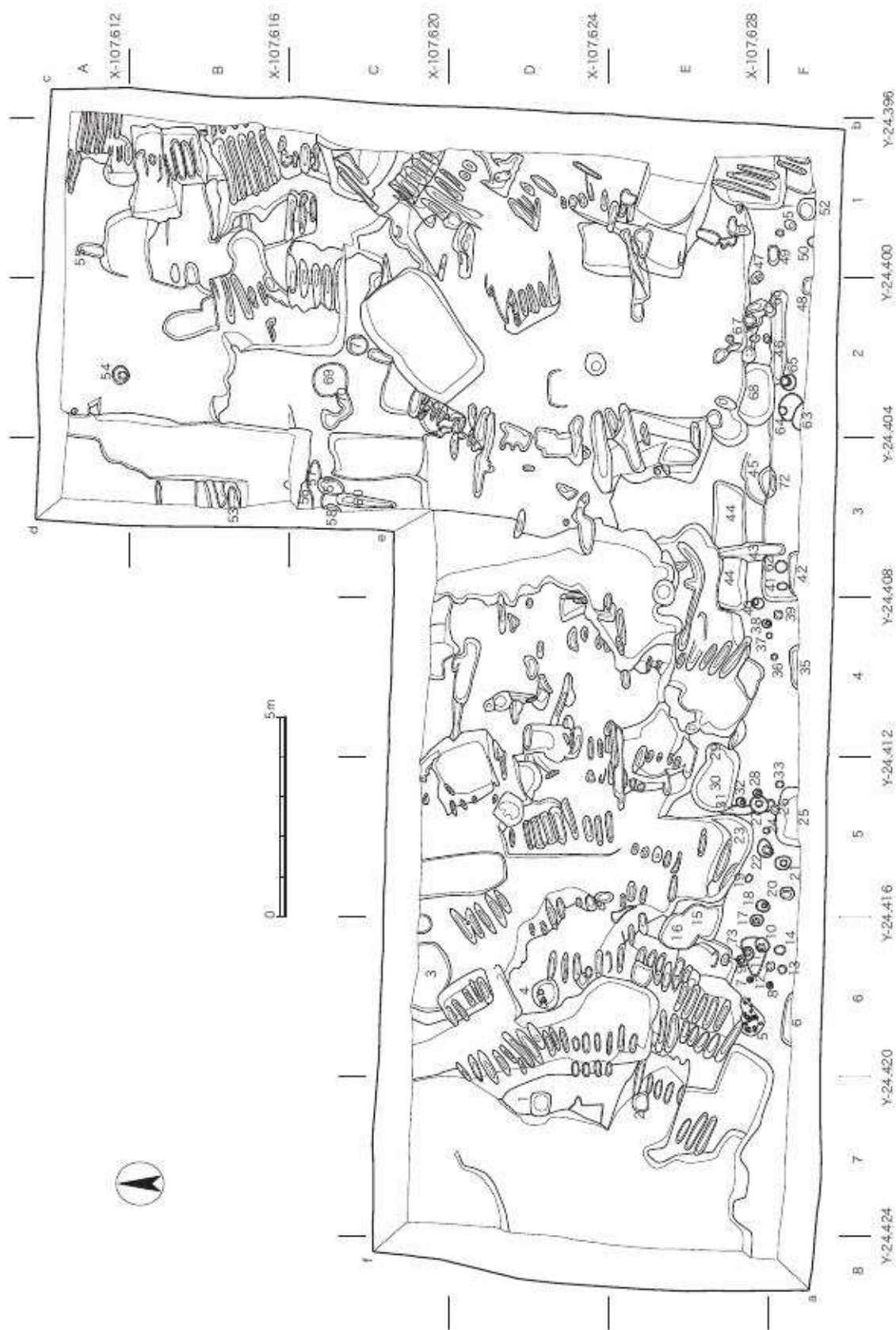
ふりがな	きたのいせき							
書名	北野遺跡							
副書名	北野東紅梅町の調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	上村憲章							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404							
発行年月日	2016年3月21日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたのいせき 北野遺跡	きょうとしきたく 京都市北区 きたのひがしこうばいちろう 北野東紅梅町 ばん 4番	26100	160	35度 01分 46秒 51	135度 43分 57秒 17	2015.09.28 ～ 2015.11.30	418 m <sup>2</sup>	マンション 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
北野遺跡	集落跡	飛鳥～室町時代	柱穴、土壇、溝、 路面	土師器皿・甕、 須恵器杯・甕、 緑釉陶器碗他				

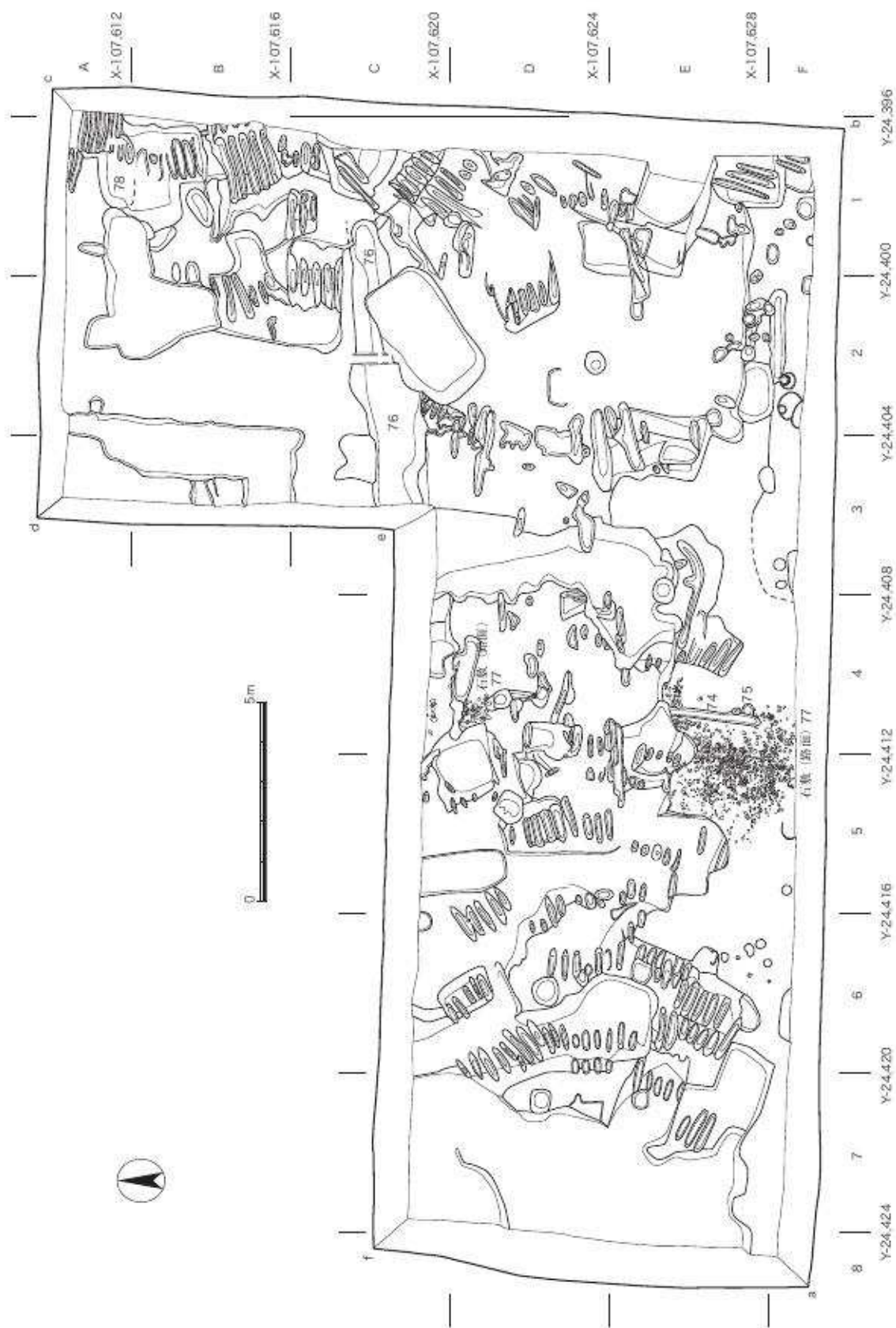




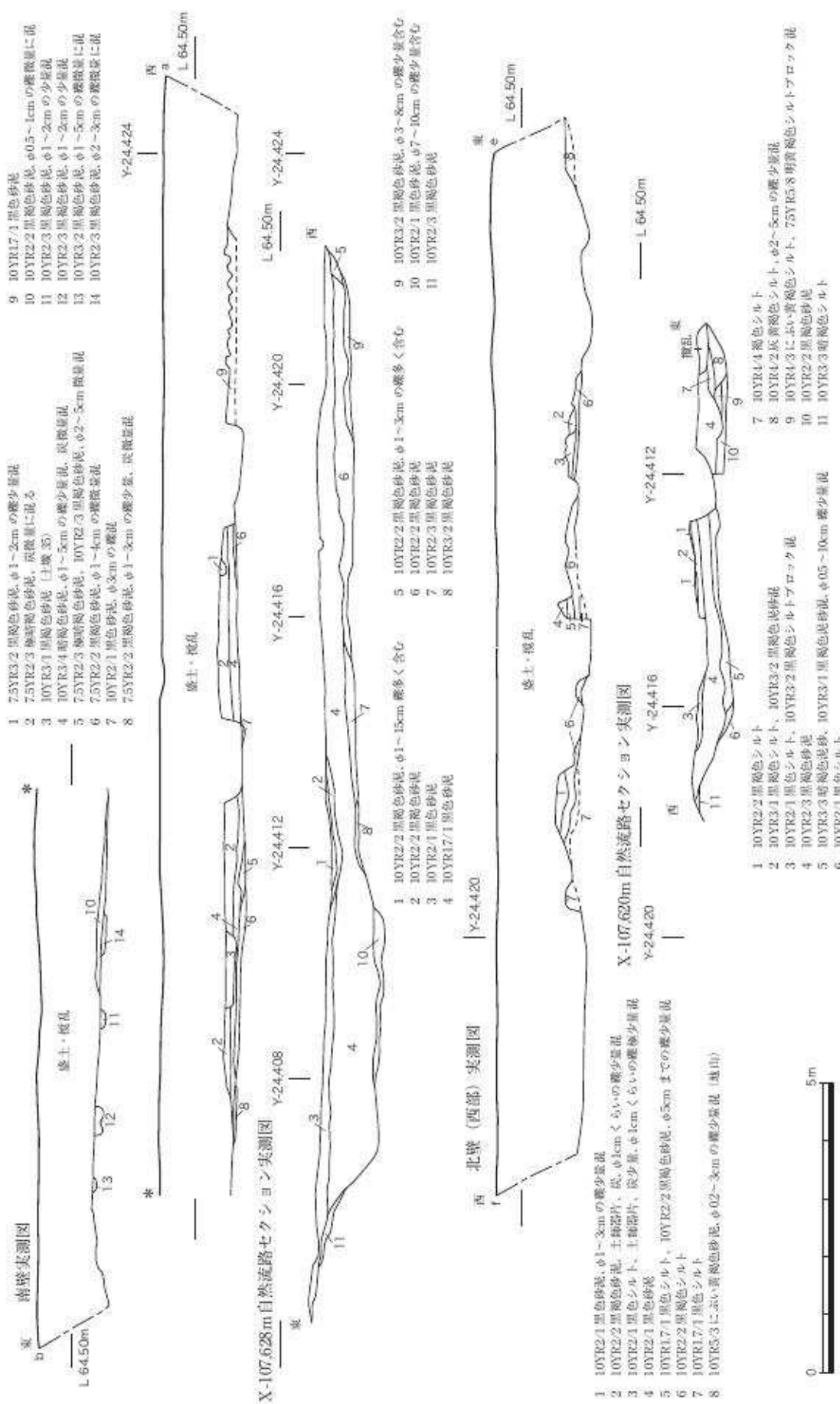
# 圖 版

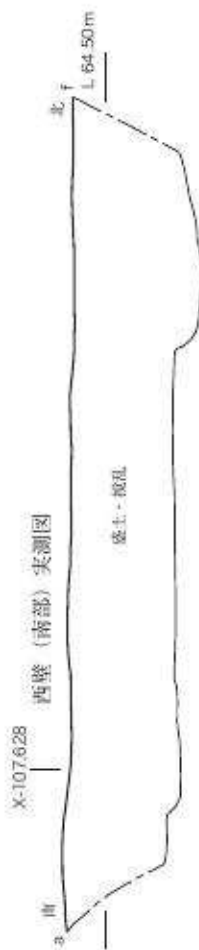
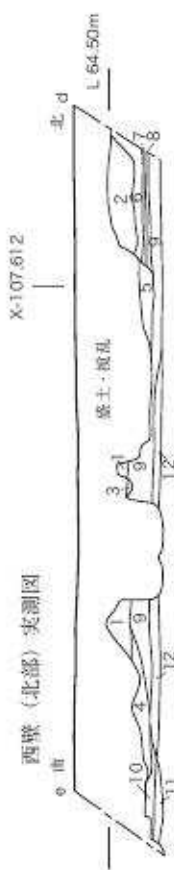






第2面平面实测图 (1/150)





- 1 10YR2/1 黒色シルト、φ0.5~2cm の塵少量混
- 2 25Y3/1 黒褐色砂泥
- 3 10YR3/1 黒褐色砂泥、10YR5/6 黄褐色砂泥多量に混
- 4 10YR2/1 黒色シルト

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、灰、土師器片少量
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、灰少量混 (溝3)
- 4 10YR2/1 黒色シルト、10YR3/1 黒褐色粘土少量混
- 5 10YR2/1 黒色シルト、10YR5/6 黄褐色砂泥多く混じる
- 6 10YR2/1 黒色シルト、φ0.5~2cm の塵少量混
- 7 25Y3/1 黒褐色砂泥
- 8 10YR3/1 黒褐色砂泥、10YR5/6 黄褐色砂泥多量に混
- 9 10YR2/1 黒色シルト
- 10 10YR2/1 黒色シルト、10YR3/1 黒褐色微砂少量混
- 11 10YR2/1 黒色シルト、10YR3/3 黄褐色微砂~粗砂多量に混じる (溝7)
- 12 10YR2/1 黒色砂泥、φ2~10cm の塵多く含む

地山 25Y3/4 におい、黄褐色泥



断面実測図 2 (L/100)





1 調査区近景（東から）



2 第1面全景（東から）



1 第2面全景（東から）



2 第2面西部（東から）





1 第2面北東部、溝76（東から）



2 第2面石敷（路面）77部分（南から）



1 第3層上層掘下後全景（東から）



2 第3層掘下状況（南東から）





1 第1面南部（北東から）



2 第1面北部（南東から）



3 土坑4（東から）



4 土坑5（南から）



5 第2面石敷（路面）77（北から）



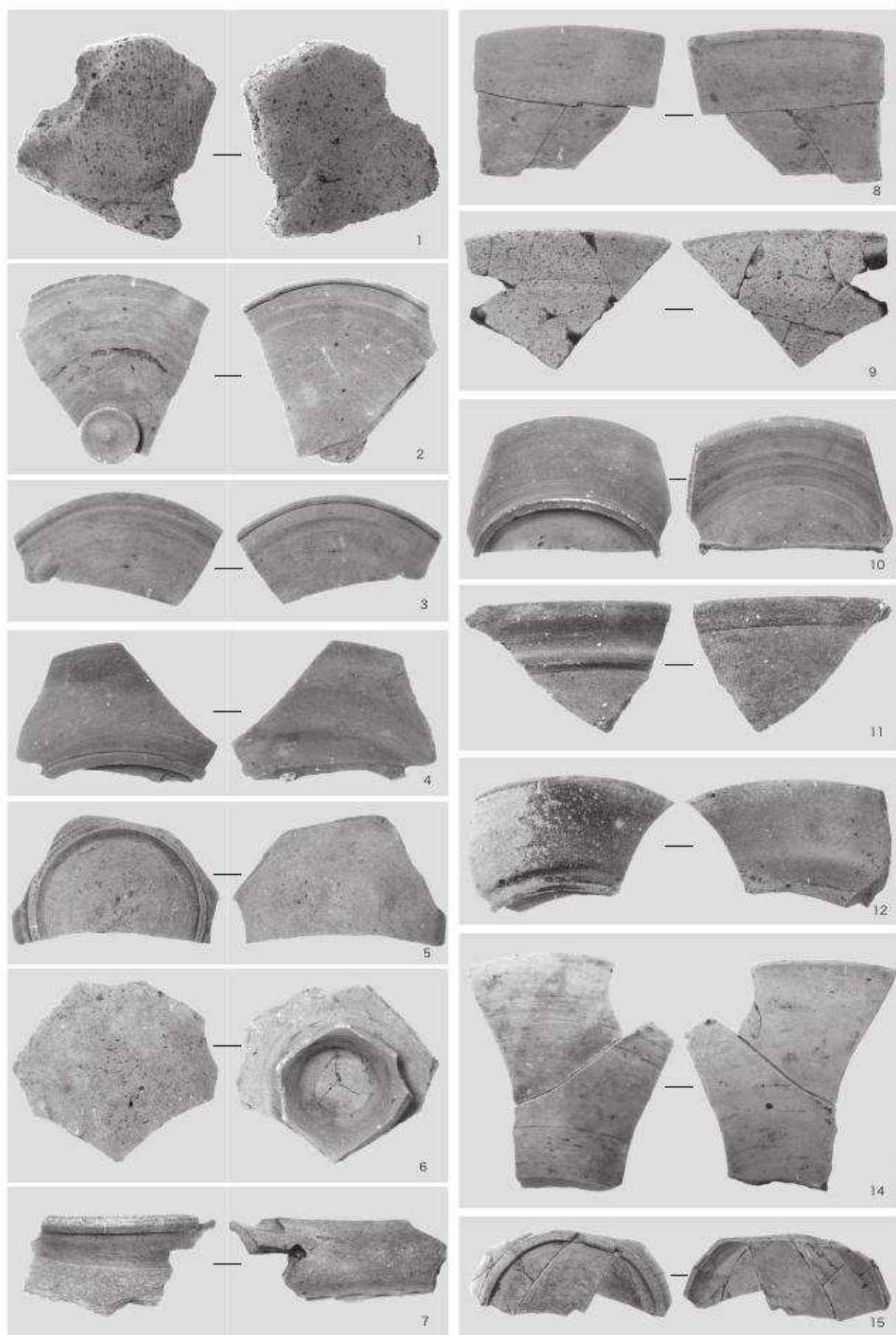
6 Y-24,408m セクション（南東から）



7 Y-24,412m セクション（南東から）

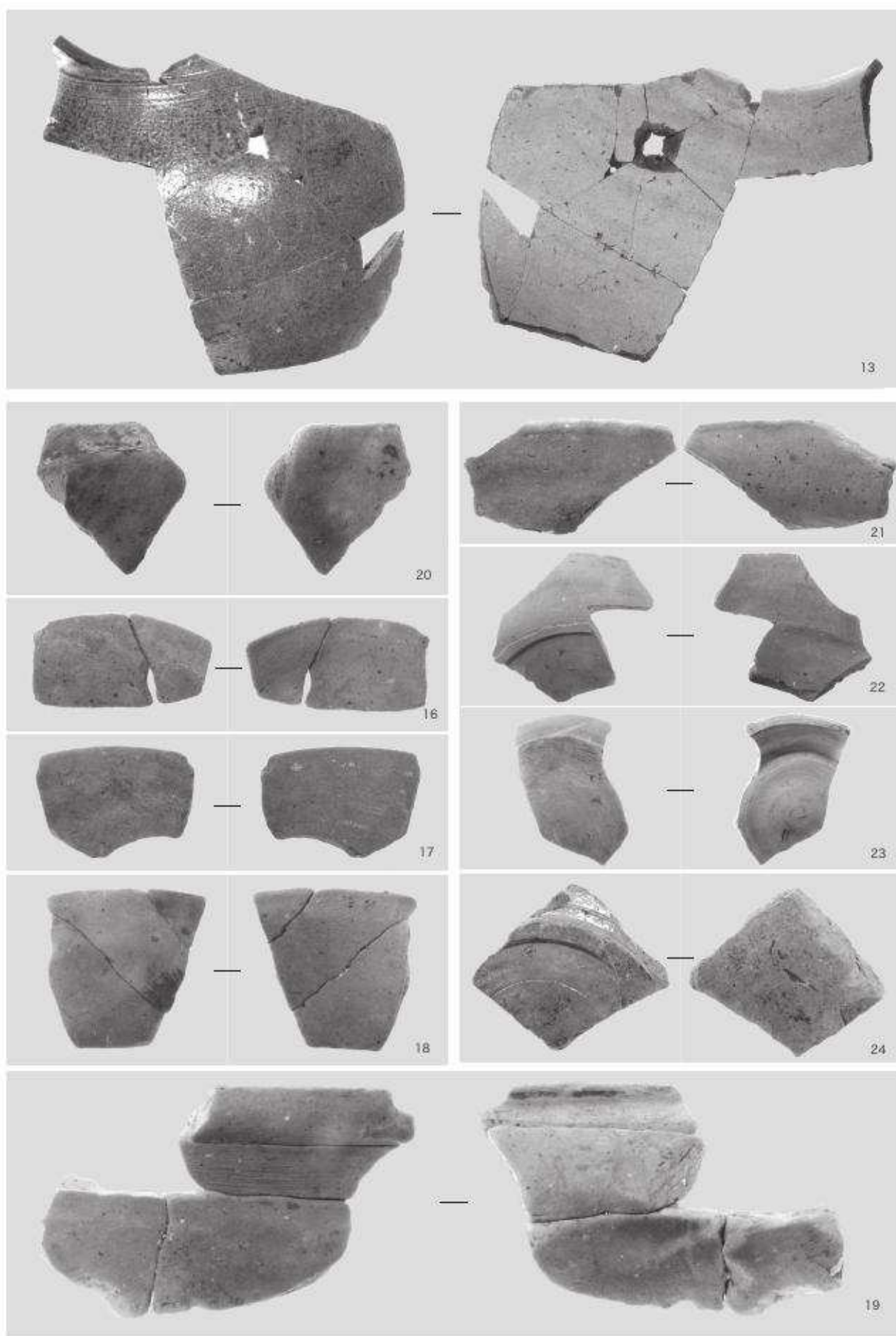


8 Y-24,416m セクション（南東から）



精査中 (1)・第3層上層 (2~9)・土壙4 (10)・土壙5 (11)・溝76 (12)・土壙78 (14)・第1層 (15)  
出土遺物





土壙 3 (13)・土壙 30 (16 ~ 20)・精査時 (21 ~ 24) 出土遺物

# 北野遺跡

－北野東紅梅町の調査－

発行日 2016年3月31日

編集  
発行 古代文化調査会

住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404  
TEL (078) 857-6368

印刷 (有)京都編集工房  
〒612-0868 京都市伏見区深草直違橋南1-524-24  
TEL (075) 643-6978









